

第 1 1 章 学生生活への配慮

1. 学部学生の学生生活への配慮

(学生への経済的支援) ★142,143

本学において給付または貸与している奨学金の種類は、日本育英会、大幸財団育英奨学生、横山育英財団奨学生、井深大記念奨学基金奨学生、岐阜県選奨生奨学金、大阪府育英会のほか、本学独自の金城学院奨学金、金城学院みどり野会奨学金、金城学院スマイス奨学金、金城学院大学貸与奨学金、金城学院大学留学生奨学金、金城学院大学外国人留学生奨学金の計 12 種類がある。

こうした各種奨学金制度については、利用したい学生が容易にアクセスできるよう、全学生に配布する冊子『PRINTEMPS』（学生ハンドブック）で詳しく学生に紹介するとともに、経済的に困窮した場合の相談窓口（学生支援部／学生生活担当）や応募方法についても同冊子で学生の立場に立って案内をしている。また、毎年 4 月には、各種奨学金制度についての説明会を開催し積極的利用を促すとともに、奨学金の募集がありしだい掲示板等で周知案内し、必要に応じて個別に窓口で対応するなど、情報提供に粗漏や不平等のないよう工夫している。その結果、大学院学生の 78.9%、学部学生の 9.2%が、前述のいずれかの奨学金を受給している。

なお、種々の理由により突発的に経済的困難に陥った学生に対しては、直ちに窓口へ相談に来るよう指導しており、退学者のうち、経済的理由による者が 7%ときわめて少数であることからして、現在の体制は相当に機能していると判断している。

(生活相談等) ★144,145,146,147,148,149

主として身体面で学生の健康管理にあたる保健室には、保健士・看護師各 2 名が常駐し、いつでも応急措置、医療施設への連絡、健康相談に対応できるようにしている。病気の治療や健康相談のために来室した学生は、2002 年度には計 1,663 名（2003 年 1 月末現在）で、内訳は内科系 42%、外科系 29%、心神科系 17%、婦人科系 12%であった。一方、心身症、拒食症、対人恐怖症などの心理相談や心理面での健康管理にあたる部署としては学生相談室があり、保健室とあわせて、学生の健康管理を心身両面で支える体制をとっている。

種々の心理相談に対応する学生相談室には、校医を兼務する精神科医の専任教員 1 名と、心理カウンセリングを専門とする専任教員・非常勤カウンセラー計 5 名（うち、4 名が臨床心理士）およびアドバイザーとしての相談員 4 名を配置している。しかし、心理相談のために来室する学生が急増（2002 年度の心理相談的な内容の相談室来談者数は、2003 年 1 月末現在で延べ 184 名で昨年比約 50%増加）してきており、これまでの体制では不十分になってきたので、2003 年度からは臨床心理士 2 名を増員し、また開室時間を約 2 倍に

延長して相談体制を強化することとした。

ごく日常的な生活相談にはクラス担任教員、ゼミ担当教員、各学科実務・教育助手ならびに事務局の学生支援部学生生活担当職員があたるほか、前述の学生相談室の相談室員も、修学相談、学業不振などの一般的な問題を抱える学生へのアドバイス対応をしている。なお、進路相談には専門のカウンセラーやアドバイザーを置かず、ゼミ担当・クラス担任の教員、ならびに事務局の学生支援部就職担当および教務担当職員があたっている。

以上、およそ生じうるあらゆるカテゴリーの相談に適確に対応できるような体制は、現状でもとっているが、本学の場合幸いなことにこれまでは、他大学に比べれば、いろいろな問題を抱える学生（不登校学生を含む）が比較的少なかったため、システムティックな対応マニュアルを存在させることなく、ときおり出現するケースに対して、ゼミ担当教員またはクラス担任教員が、学生相談室や保健室および学生支援部の職員と連携して対応することで、問題の解決に当たってきた。ただ、問題を抱えた学生（特に心理面の問題を抱えた学生）が増加傾向にあること、対応が遅れたために退学につながるケースも多くなってきていることも確かなので、今後はこれまで以上にきめの細かいサポートが必要であると考え、現在、全学的な学生支援体制にもとづく学生相談対応システム構築を検討中である。

保健室職員や学生相談室相談員によって専門的な精神科治療等が必要と認められた学生については、家族の同意のもと、校医である精神科医の専任教員が応急処置を施したのち、症状に最もふさわしい地区近在の専門施設に連絡して治療にあたらせる体制をとっている。

学生生活に関する満足度については、定期的にはないが、学内エコキャンパス推進室や業者による包括的な満足度調査を実施している。全体として学生の本学に対する満足度は高いが、調査によって明らかになった問題点（自習室や憩いの場所の再配置と整備、見易い掲示板への改善、食堂問題、その他学生が不便に感じているキャンパス内環境整備上のこと）については、大学全体または担当部局でその解決に向けて努力をしている。こうした学生側に立ったキャンパス内環境整備の一環としては、2001年度に掲示情報の一部情報をプラズマディスプレイ化して学内に5ヵ所設置した。また2001年度に学生生活委員会と幹部職員を核とするキャンパス・アメニティ審議会を発足させて改善問題を検討し、その結果、2002年度には大規模な施設改修工事を行って本部棟にインターネット・カフェをコンセプトとする学生ラウンジを開設、2003年度からは大学生生活協同組合の導入によって学生食堂ほか対学生サービスの改善を図ることにした。

(就職指導) ★150,151,153,154,155,158

卒業生の大半が就職を希望する本学にあつて、進路指導とはほとんど就職指導と同義である。就職先は学科によって、一般企業、幼稚園・保育園、福祉関係、公務員、教員などと多様であるため、それぞれの分野に合わせた別々の就職指導を行っている。また、3年次からのインターンシップ、1年次からの現代職業論など、職業コンシャスな授業科目も職業への自覚を促す上で効果をあげている。さらに、資格取得支援のためのキャリア・ア

ップ講座を年間約 20 講座開講し、学生達に資格を取得させることにより、将来の目標を早い段階から自覚させるようにしている。

本学の学生支援部就職担当職員の就職サポート活動は、種々の就職ガイダンス、個別指導、企業とのパイプづくりなど、きわめて多岐に及んでいる。特に個別指導には力を入れ、親身になって学生達の相談に応える体制が整えられている。また、年間 400 社以上の企業訪問により企業から大きな信頼を得て、例年就職率 95%以上という成果を上げている。

学生への就職ガイダンスについては、就職希望者を対象として、3 年生の 7 月から 4 年生の 5 月まで各種ガイダンス・講座をきめ細かく実施・開講している。これは主として全体ガイダンス的なものであるが、このほか時期と内容に応じて、小グループでのガイダンスや年間を通しての個別相談を行い、就職活動支援全般を行っている。また、卒業生を学内に招いての懇談会、人事採用担当者を学内に招いての学内企業セミナーも実施し、採用に直結する大きな成果をあげている。

就職活動の早期化に対しては、ガイダンスの開催時期を早め、かつ開催回数を増やすことで対応しているが、重要なのは低学年から職業への自覚を促すことであり、「現代職業論」やインターンシップなど、職業コンシャスな授業がそれに貢献するものとする。ただ、あまりに早い「青田買い」は大学教育を空洞化させる恐れがあり、早期化抑制のためには学生就職連絡協議会等の結束の下で、企業に対して何らかの働きかけをする必要がある。

就職統計データについては、就職先データを細目にわたり整備し、就職ガイダンスで学生に資料として情報提供するのはもちろん、在学生の卒業生訪問、インターンシップ先の開拓、教員による企業訪問などに活用するほか、入試広報宣伝資料としても大いに活用し、高校生達への PR に役立っている。

(課外活動) ★156,157,159

本学には 47 の公認クラブ・サークルがあり、3 つのクラブハウスを拠点にして活動しているが、大学父母会からの活動助成費 380 万円はそれらを統轄する学生会およびサークル協議会によって公平に配分されている。大学としては、学生会およびサークル協議会の諸活動が円滑に進められるよう指導助言している。また、課外活動の活性化を目的として 2001 年度に制定された学生表彰規程に基づいて、2001 年度には、個人で 13 名、団体で 5 団体 61 名の計 74 名の学生を、2002 年度には個人で 12 名、団体で 5 団体 88 名の計 100 名の学生を表彰した。表彰制度の発足は、表彰を受けることで課外活動を行う上での励みになり、2002 年度に聖歌隊 (クワイア) が表彰を受けたり、軟式野球部 (金城リーグ)、空手部、ラクロス部、ハンドベルクワイアなどが 2 年連続の表彰を受けるなど、課外活動の活性化に大いにつながっている。

本学におけるクラブ加入率は約 20%弱で全国平均のレベルにある。また、どのクラブ・サークルもレベル的には高い水準にあるというわけではなく、一般的と言える。しかし、本学の課外活動に対する学生意識の特徴として、課外活動を豊かな学生生活を送る上での有意義なものとしてとらえ楽しんで活動している学生が多いことがあげられる。なお、毎

年のように全国大会に出場・入賞している団体・個人、また国際的な活動で高く評価されている団体・個人もあり、課外活動を行う他の団体・個人の良き目標となっている。

本学には、全学生の意見を代表する組織として、民主的に選ばれた学生会がある。大学が学生会と定期的に意見交換を行うシステムは存在しないが、学生支援部に窓口を設け、いつでも相談に乗り、苦情を受け付けることができるようになっている。また、キャンパスの数カ所に投書箱を設置し、匿名の苦情、意見具申に対処できるようにしている。

2. 大学院生の学生生活への配慮 ☆126,127,128,129,130,131

日本育英会奨学金受給候補者としての推薦の他、本学独自の奨学金制度として、金城学院大学大学院特別奨学金、金城学院奨学金、金城学院スマイス奨学金（キリスト教信者対象）の各制度があり、それぞれの規程にもとづいて、毎年一定数の奨学生を選考している。学生数に比し受給可能枠は多く、学生の希望をかなえるという点でかなり手厚い制度として機能している。また、外国人留学生に対しては、金城学院大学外国人留学生奨学金があり、これについても、受給希望者の期待に応えていると言えよう。これらはいずれも併せて受給することが可能であり、受給者にとっては恵まれた状況であると評価できる。

これらの奨学金に関しては、大学院研究科各専攻教員や実務助手をとおして公募状況の周知を行い、指導教員が申請書の作成についても助言を行っている。その他、大幸財団学芸奨励生等の民間の奨学金に対する応募等についても対応しており、受給面において公平性の確保に配慮している。

一方、学生に対する研究プロジェクトへの参加の促進は、教員の個人的裁量で参加している事例があるが、大学院研究科として特に参加を推奨する特段の制度などはない。本学大学院研究科においては学生数も多くないために教員は学生に対してかなりきめの細かい対応が可能であり、現時点では制度的な整備をするまでの必要はない。

各種論文集等への執筆に関しては、学生に対してできる限り執筆を促す努力を行っている。具体的な方策として、文学研究科においては、指導要綱に基づき、年間の研究計画の進捗状況を見て、積極的に指導している。また、人間生活学研究科では、特に博士号学位論文執筆申請に際しては、学術論文の掲載が義務づけられるので、指導教員が積極的に執筆を促している。

学生の心身の健康に関しては、保健室、心理臨床相談室など学内諸施設の利用等があるが、基本的には学部との共通部分が多い。指導教員と指導生との関係についての問題は、文学研究科においては、複数指導教員制をとることによって学生が納得できる体制が維持されるよう努力している。人間生活学研究科においては、研究科内に心身の健康に関する専門家が複数名所属することもあり、専門的な立場からもこうした問題への対処は適切に行われている。

学生の進路指導等は、各専攻ごとに個別に対処するほか、大学の組織による支援等学部

と共通する点が多い。なお、本学事務部において、業務が集中する時期にアルバイトとして大学院生を採用する例がある。このような例では、大学院生にとって経済的な支援となるだけでなく、実務体験することによって訓練をする機会となったり、自分の適性を見出す機会ともなる場合があり、学生に対する進路指導的な効果も生んでいる。